

インタビュー 学生生活と戦争
うえずみしようへい

上住昇平さん（昭一九卒）に聞く

聞き手 永井 均
編集 山中 一弘

上住昇平さんは、一九一九（大正八）年十二月生まれ。三八（昭和十三）年立教大学予科商科入学、四四（昭和十九）年経済学部卒。

卒業を前にした四三（昭和十八）年九月、海軍予備学生として旅順へ。その直前、大学の黒板に書いた後輩へのメッセージは、自ら撮影した写真として残っており、『BRIGGS AND LYN 立教学院百二十五年史図録』にも掲載されている。

大学から送られた日章旗

上住氏 これが立教大学からいただいた日の丸です。私が戦地に行っている間に、私の家、大連の親のほうへ送ってきました、それで親から私の乗っていた船へ送ってきただんです。

聞き手 大学当局から送ってきたということですか。

上住氏 そうですね。そこへ印鑑がありますね。

聞き手 「立教大学之印」ですかね。

上住氏 名前も大学のほうで書いて、送ってきたと。

聞き手 任官されてすぐでしょうか。

上住氏 いえ、おそらく昭和十八年の、学徒出陣の前に送ってきたと思います。私は学徒出陣より一期早く入っているんです。ですから、それが回りまわってきたと思うんです。

聞き手 でも、こういうものが大学当局から各人に送られていたというような史実をわれわれはまったく知りませんで……。ある方のものは、「総長三辺金蔵」と書いて、まわりに何人かの関係者が署名している、というのがありました。

上住氏 私のあとは、総長なり学長のサインが入って

たと思います。

聞き手 なるほど。

上住氏 私の場合はね、もう徴兵検査も済んで、私の国が播州の赤穂なものですから、陸軍の姫路の師団にある高射砲連隊へ十八年の十二月に入ることになっていたんですよ。ところが海軍が、予備学生の試験があるぞといって全大学に呼びかけたんですね。で、われわれみたいなのが受けに行っただけですよ。

私は目黒の海軍大学で受験したんですがね。われわれの学年から五十人ぐらい受けに行っただけですけど、何ですか、私なんかの学年では他にだれも兵科のほうへ通らなくて。私は第三期兵科予備学生というんですが、その前の第二期兵科予備学生が、台湾の高雄の南、屏東（ひんとう）というところで訓練を受けたんですね。そこで、立教の一、二年前の卒業生がちょっと不祥事を起こして罷免になりましたね、それで「立教のやつは」ということで目をつけられました、非常にわれわれは迷惑をしたんですね。任官するまで迷惑しました。

それから、海軍の予備学生に入ったときは、私たちは旅順で訓練を受けたんです。これも呉から大阪商船の白楊丸という船に乗せられましたね。もうそこで全部学生服は脱ぎまして、海軍の仕官の服装を与えられて、防寒外套までもらったものですから、私はたまたま大連に家

があつて旅順の中学を出ているものですから、あつ、これは寒いほうへ行くからおそらく旅順だろうと。旅順は昔から海軍の要港だったもんですから、そちらの方で訓練を受けるんだらうと思ひましたら、案の定、目的地が旅順だったんです。それで旅順の、日露戦争時代のロシアの海兵団の宿舎をきれいに改装した兵舎に入りました。もう十月だったもんですから、暖房もちゃんと入る。ああいう兵舎はおそらく日本全国探してもなかっただろうと思うんです。ただし、その訓練はものすごい訓練だったんです。それこそ、訓練中に心臓麻痺で二人ぐらい亡くなりましたし、ジフテリアがまん延しまして三人亡くなりました。ちよつと今から考えられないぐらいの訓練を受けました。

約五カ月ぐらいしまして、今度は横須賀のほうの、海軍の各専門の知識を得るための対潜学校（実科学学校）というところに行きまして、専門の勉強をさせられます。それが即席。もう、海軍はものすごく急いでおったもんですからね、五月の末までに完了するようにと。十九年の五月の末にはもう一応終了しまして、少尉に任官したんです。それから、特殊学生とかいうので、いろいろまた勉強させられましたね。海軍というところは、もう一から十まで勉強、勉強で、そんなような教育で。

大陸で育つ

聞き手 なるほど。いま、はじめに日章旗のことから海軍入隊の件を伺いましたけれども、ここからは順を追って伺わせてください。上住さんは旅順の中学校を卒業され、立教に入学しました。その経緯とか、立教大学の中での学生生活というか、そういうことを中心にお伺いしたいと思うのですが、まずお生まれは。

上住氏 私は大正八年十二月の二十九日、大阪の赤十字病院で生まれたんです。それで、生まれて間もなくして今の中国東北部、旧満州の奉天で父親が事業をやっておりますので、父親のほうへ合流したんです。

私の父は旧安宅商会の安宅弥吉という人の給付生の第一号で、大阪高商、今の大阪市立大学を出していただいて、そのまま安宅商会に入ればよかったんでしようけれど、当時の鈴木商店（今の日商）へ入り、駐在員第一号で大連に赴任したんです。その当時は鷹揚だったんですね、鈴木商店と安宅との両方の駐在を兼ねて仕事をしたというんです。

そして、大連で私の両親が結ばれたんですが、十人の兄弟を私の父が親代わりで全部面倒を見た。これは、勤めておってとはとてもじゃないが食わせられないので、大連でやっていた、満州の物産、大豆とか、豆かす、綿花、

そういうものの取り引きを、奉天で要するに旗を揚げたわけなんですよ。

私は幼稚園と、小学校の一年生まで奉天の学校に行っただんです。ところが張作霖、張学良などの内乱がありまして、貨幣価値が毎日下落するもんで事業を支えきれなくて、結局奉天から上海まで下がつてきました。

上海には、たまたま私の母のおじが、日露戦争後すぐに瀛華洋行という会社を揚げていましてね。その人は、頭山満などといった人と一緒に大陸に渡って上海に根を下ろした人で、戦後までずっと上海を基盤に、大陸には全部支店、出張所がありました。その支配人を父親が任されましたね。それで、綿花の買い付けとか、そういうことで漢口ぐらいいまではいつも行っておりまして。

しかし内乱が日に日にひどくなったもんですから、私なんか小学校の一年だったんですが、ある日、婦女子総引き揚げということで、二四時間以内に日本租界の、あれは勝田旅館、今でも名前を覚えてるんですが、そこへ避難する。そこから上海丸というのに乗せられまして、それで長崎へ着いて、神戸のほうへ家族で引き揚げました。それで、神戸の雲中小学校に六年までおりました。

中学校は、父の国の兵庫県赤穂で、まだおじいさんが中風で寝とったもんですからそれを看病せんといかんというんで、母親と私ら兄弟が赤穂まで帰りましてね。そ

こで二年間看病して、おじいさんが亡くなるまで、私は赤穂の中学に行っただけです。

その後、父は大連で二度目の旗を揚げまして、ずっと引き揚げまで大連におりました。じつは私は中学二年になるときにちよつと体を壊したもんですから、一年、国でぶらぶらしておりまして、その後家族で父と合流するために大連に移りましてから、私も旅順の中学に転校したわけです。二年に編入しました。

旅順の中学というのは官立で、これは満州で一番古い学校でしてね。関東都督府中学校という名前で、日露戦争直後に、日本で初めてあんな学校ができたと思うんですけど。われわれのときは、関東州庁立旅順中学校といっただけです。

聞き手 先生方は皆さん日本の方で、入学者も日本人だったのですか。

上住氏 ええ、みんな日本人ですね。日本人いしは朝鮮の人ですね。ここで五年まで。しかも私らは、寄宿舎生活をずっとしました。

聞き手 それは強制的に、パブリックスクールのようにですか。

上住氏 旅順に家がある者は自宅登校。それから、われわれは寄宿舎生活。まだ全満に中学というのがありまして、それこそ北は海拉爾とか、満洲里あた

りから、南は青島、上海、天津、北京、芝罘ですか。その辺からみんな寄宿舎に入りました。

聞き手 ご家族の方は、大連の、どちらにいらしたんですか。

上住氏 大連市です。桃源台というんですね。番地は一五六です。

聞き手 これは、旅順の中学校からは相当距離があったということですか。

上住氏 そうですね。汽車も長距離バスもありましたから、一時間半ぐらいで旅順と大連は行き来できるんです。聞き手 それで中学校を卒業すると、進学あるいは就職するということもあると思うんですけども、五年生を卒業されてすぐ立教大学に入学されたのですか。

上住氏 私は五年から立教を受けようと思いましたが、ちよつとやっぱり体を壊しまして、大連の大連高商というのに一年行きまして、それから立教を受けたんです。

聞き手 この大連高商というのはどういった学校ですか。

上住氏 これは後に官立になりましたけど、その当時はまだ私立といえますか、大連の要するに財界がつくった高等商業です。全満州、日本からも、県の推薦でみんな来たもんです。

立教大学予科

聞き手 大連高商に入って一年間勉強されて、それから立教に。なぜ立教を選ばれたのでしょうか。

上住氏 これはね、親父はもう禅宗のこりこりなんですけど、母親がクリスチャンだったんですね。そういう関係で、やっぱり自分の子供にはそういう宗教的な学校がいいんじゃないかと。特に私の場合は家から学校へ通わずに、もう全部寄宿舎とか、そういう生活が多いもんですからね。

私の五つ違いの兄がおるんですがね、これが同志社に行っただけです。で、私は勉強するなら東京へ行きたいし、やっぱり立教がいいって言っただけですね。

聞き手 東京のミッシオン・スクールは立教だけじゃなくて、当時、明治学院だとか青山学院だとかがあったと思うんですけども。

上住氏 あれは専門学校だったんですね。

聞き手 それでは、ミッシオン・スクールで当時大学として存在していたということで、やっぱり立教はステータスがあったんですね。それとお母さんのお勧めがあったこと。それが選ぶ原因だった。立教大学に入られたのは予科の、二年か何かに入られて。

上住氏 いやいや、僕は一年から。

聞き手 当時は予科三年制で、学部も三年制ということですね。立教大学の予科一年に入られて、そのときにはどこかに下宿されたのでしょうか。

上住氏 下宿といってもね、私は最初、親戚がいましたもんでね。私の父親の妹の嫁ぎ先が日本郵船におりまして、その当時ニューヨークの副長をやっとったもんで、その当時ニューオーリンズの副長をやったもんで、それから、留守宅なんですよ。それで、従兄弟が四人おるもんだから、一部屋あてがわれて、そこへ下宿をしたんです。西武線の沼袋、中野区沼袋ですね。

聞き手 立教まで、どうやって通われたんですか。

上住氏 高田馬場で乗り換えて池袋に。その頃まだね、西武線といったら本当に新井薬師の辺から火葬場が見える。火が見えるんですよ。それでね、春先になるとあの電車は肥やしの匂いがすごい。走ってても、線路が悪いもんだからこう（揺れて）ね……、人もそうは乗りませんよね。それで、吊り革なんかがね、こう揺れるんですよ。そんな時代だったですね。

聞き手 予科は文科と商科に分かれていましたが、どちらに入られたのですか。

上住氏 商科です。

聞き手 選ぶ際には。

上住氏 もう最初から商科ですね。

聞き手 文科のイメージ、逆に商科のイメージというの

は当時どのようなものでしたか。

上住氏 これはね、立教の商科ちゅうのはね、わりと古
いんですよ。聞こえもいいんですよ、社会でね、昔から
立教の商科ちゅうのは。

聞き手 ああ、そうですか。社会的評価が高かった。

上住氏 ええ。

聞き手 それで入学されたときの年齢というか、いつ入
学されましたか。

上住氏 おそらく私は合計すると二つ年を取っているん
ですよ。だから、入ったのは十九ぐらいでしょうかね。

昭和十三年に入ったんですか。

聞き手 十三年四月ですね。次に、いよいよ立教大学で
のキャンパスライフについて、少し伺いたいです。

それまで長くお住まいになった兵庫とか大連、旅順から、
東京に上京されました。当時の立教の雰囲気というのは
どのようなものでしたでしょうか。

上住氏 やっぱりこじんまりしてね、大学としてはそれ
こそユニバーシティというよりも、むしろ単科大学に等
しいぐらいのね、もう同じ学年の者ならたいい顔見知
りで。そういうあれが今日ずっと続いています。一応、昭
和十九年の卒業になってますからね——十八年にみんな
学徒出陣とかそういうので行ってますけど——、だから
現在、昭和十九年卒の会合をずっと戦後も続けて持つて

いましてね。これはおそらく特異な存在だと思えますよ。
毎月十九日に、このセントポールズ会館で十四、五人
は集まってきました。これは珍しいと思いますよ。

聞き手 珍しいですね。全国でも、そんな同窓会という
のは。

上住氏 来月、一月は二十一日に、新橋の新橋亭で新年
会をやるということになっているんですよ。

聞き手 あそこは卒業生の経営ですよ。

上住氏 卒業生なんですよ。われわれは十九年の卒業、
社長は十九年に生まれたと言っていましたね。

聞き手 それだけ結束が強いというのは、何なんですよ
ねえ。在学時代から、すごく仲がよかったんですか。

上住氏 まあ、あのね、こういうことじゃないかと思う
んですがね。要するに、たしか予科の授業が五〇分か四
〇分か、短いんですよ。それで午前中に終わらしちゃう
んです。それで午後からは、何か体育系の運動部にみん
な所属しないといけない。野球部でもね、そこそこいつ
も勝ってましたね。優勝こそ、最後に三校同率ぐらいで
やったんですかね。西本幸雄とか、好村三郎。西郷準と
いうピッチャーがおったんですね。それまではたいいて
二番か、三番ぐらいでダークホースになる。ラグビーで
も、その当時は慶応でも明治でも、食ったのは立教なん
です。けっこう強かったですよ。そういうスポーツマン

が皆、戦死しましたね、考えてみたら。

聞き手 先日、六大学野球の立教初優勝の話を書いたのですが、そのときにメンバー表の中に「予」の字があつて驚きました。予科の選手も六大学野球に出ていたのですか。

上住氏 出てますよね。とにかく優秀なのはどんどん出したですからね。だから、予科の一年生でも出てますよ。雁瀬というのがおったんですがね。これなんか、やっぱり甲子園で優勝したやつですからね。それから、永利なんていうのも一年で出て。

聞き手 そういうことなんですか。上住さんは午前中の授業が終わって、午後はさあスポーツだというときに、何部を選ばれたのでしょうか。

上住氏 私は剣道部です。中学のときもずっと剣道の選手をやつて、全満で優勝したことがあるんです、個人優勝を。

聞き手 それは大変な事ですね。

上住氏 ですから立教に入りまして、予科のときに選手に選ばれて、学習院とやっただんです。それまで学習院に、立教は勝つたことがないんですが、私が先鋒で出まして、三人抜いて初めて学習院に勝つた。それで、むこうの道場でコンパをやりましたよ。学習院と立教と。芸達者なのは学習院の、みんな男爵とか子爵、公爵の息子ばかりで

りですよ。芸がうまい。立教は芸なしだった。

それで、立教で剣道を続けるつもりだったんですけどね、一つは、弱いことなんです。私が、あるときなんか部員五〇人を並べてなぎ倒したことがあるんですよ。こう、瞬間的にね。絶対に私、キャプテンにさせられるはずだったんです、私の学年で……。そんなの私、ちよつと頭がおかしくなるしね、これはいかなど思つて。それと同時にね、上級生が学校へ来るのに着流しで来るわけですよ。着流しで来てね、学校へ来なくて、剣道部の道場に張り込んでるわけ。そういうことは、もうたまたまなくなつてね。それで、何かというと喫茶店に呼び出ですよ。池袋の駅前だね。

聞き手 ミルクホール。

上住氏 ミルクホールならまだいいんですけど、喫茶店ですよ。その頃の喫茶店というのは、なかなか洒落た喫茶店ですからね。紫薫しけん荘なんていうのがありました。もうこれでは勉強がおろそかになると思つてね。それで三年に上がるときに、もうきつぱりやめたんです。やめるときに、だいぶん言われましたけどね。私は家が大连にあるので、夏休みはどうしても帰りたいし。夏は合宿をやりますから、合宿なんか行ったらそういう柄の悪い連中に何をされるかわからんしね。それで私は身を引いて、支那研究会というのを作りました。

私は予科のときは支那語なんですよ。ドイツ語とフランス語は従来からありまして、支那語科というのが初めてできたんです。

聞き手 できた最初の。

上住氏 最初のクラスです。四〇人ほどね。三八人だったですかね、クラスメートは。それが今は、八人しか残っていませんが、東京では今三人か四人ぐらいしか集まってこないんです。

聞き手 支那語のクラスは、やっぱり時代状況ででききたんですかね。

上住氏 そうですね。私はたまたま向こうで育っておったから、先生の助手みたいなことをやって、クラスの者に教えたりなんかしとったんですけどね。それで、今度は支那研究会というのをつくりましてね。それから、今度は戦争があれしてきて、海外事情研究会というのに全部統一したんですね。アメリカ研究会も、たしか一緒にあったと思います。ですから対外的には、海外事情研究会だったと思います。各学校ともいろんな交流がありましてね。

聞き手 ということは、主に支那研究会が母体になって。

上住氏 はいはい。

聞き手 海外事情研究会というのは、いろいろな資料の中で目にするのですが……。

上住氏 中国の交換学生とも交流して、湯島の孔子堂で交歓会をやったような写真が残っていますよ、いまだに。聞き手 あと、当時の学内におけるキリスト教活動はどうでしたか。

上住氏 キリスト教活動は、そんなにね……。礼拝はありましたけど、それも強制されなかったし。

聞き手 そうですか。

上住氏 ただね、だんだん陸軍の配属将校が……。はじめのうちはいい配属将校が来てましたけど、最後に来たのがもう名うての大変な教官が、明治大学から転配で来たんですよ。

聞き手 飯島大佐。

上住氏 飯島大佐ですけどね。だからいれ『BRICKS AND IVY 立教学院一二五年史図録』に飯島大佐の写真が載っているのが不思議だといってね。

聞き手 そういう、マイナスの評価が非常に。

上住氏 はい。プラスの評価はないですね。

聞き手 いや、そうでもないようなんですね。

上住氏 そうですか。それはだれが。

聞き手 例えばフランス帰りで教養がある、フランス語をしゃべるといふこととか、運動部の人たちには優しい部分もある。私もそれを意外に思ったんですけれども。上住氏 いや、要するに明治大学を肅清して立教に来た

わけですよ。

聞き手 そのような流れですね。

上住氏 ええ。東条英機と同期なんですよ、陸士で。それだけ年を取っていた。フランスの駐在武官だったといえますけれどね。一応、スマートだったですよ。まあ、私はあんまり好きでも嫌いでもないし。最後は海軍のほうに行ったから、その挨拶に行ったら、「それはおめでとう。ひとつ、あとの余暇を大いに満喫しまえ」なんて、激励されましたけど。

聞き手 卒業生の方は、飯島大佐を悪く言う人が多いですよ。

上住氏 そうですよ。例の学徒出陣で、神宮で行進をやりましたね。立教の旗だけが十字の旗でしょう。飯島大佐が「これで行進すること、相成らん」と言つて、そこでたしか、白い布に立教と書いて、それを持って行進したとか聞いてますけどね。もうそれこそ、ずいぶん痛めつけられたのがおりますよ。

聞き手 上住さんはそうすると、海軍の予備学生を受けられるときは配属将校の推薦ではなかったということですか。

上住氏 いや、別に推薦とかそういうのではないと思いますよ。海軍というところは、あれも最後は体力テストがあつて、綱にぶら下がるんですよ、一分間。これが大変

ですよ。何千人という人がその綱にぶら下がっているからね、ロープがもう、ぬるぬるですよ。こんなぬるぬるのところにぶら下がったつて、ストンと落ちるのが当たり前だ。それでね、ぶら下がったと同時に、こういうふうには手を曲げたんですよ。そうするとね、あれはおもしろいもので、これでストッパーがかかるんですね。それで一分間歯を食いしばつて。

それで、今度は面接なんです。面接はね、中佐か少佐の人が個室で面接ですよ。

聞き手 どのようなことを聞かれるのですか。

上住氏 海軍を何で志望したか。私なんかのときはね、山本（五十六）元帥が亡くなられたということだね。まあ格好よく言えば、山本元帥に続けというあれで来ましたと。そうしたらね、「海軍におまえ、知り合いはあるか」と、こう聞きますよ。「あります」と言つた。「だれだ」と言うからね「草鹿龍之介（当時海軍少将。昭和十六年に第1航空艦隊参謀長として真珠湾攻撃を成功させた人物）」です」と言つたんですよ。びつくりしちゃつてね。草鹿氏は連合艦隊参謀長になった人で、私の母方の親戚なんです。相手はびつくりしちゃつてね。

聞き手 雲の上の人でしょうからね。

上住氏 まさかと思つたでしょう、そのときには「見解を承り」と。採用されたのは一カ月ぐらいあつたつたで

すよ。向こうも調べたんでしようね。もうだめかなと思つていたら、電報が来まして。来たと同時に、呉鎮守府に出頭せい、となつてたんですよ。それで、東京から汽車に乗つて。その当時、一等というのはまず乗らないんで、普通、二等車か三等車です。このときは二等に乗れというわけですよ。旅費は皆、出るんですよ。それで二等に乗つて、呉まで行つて。

聞き手 優遇されたということですね。

上住氏 優遇されてますよね。それで行つたら、もう、すぐあれでしょう。学生服を脱いで、海軍士官服を着せられちゃうわけですよ。短剣から、全部ね。

聞き手 任官は昭和十九年の五月ということですね。

上住氏 そうです、そうです。

聞き手 卒業されたのは十九年の三月。

上住氏 十八年に、もういつちやつてゐるわけですがね。

聞き手 そのときにはまだ正式な任官ではないわけ。

上住氏 そうです、ええ、准仕官ですね。要するにね、海軍でいえば兵曹長よりも上で少尉候補生より下なんです。そういうような待遇なんです。

聞き手 待遇はそれで、身分としては兵科の予備学生という名前になる。

上住氏 そうです。

聞き手 その予備学生が取れるのが、十九年の五月で、

それから正式に……。

上住氏 そうです、そうです。少尉になる。

聞き手 話が前後して恐縮なのですが、確認なんですけれども、剣道部をお辞めになったのは、予科の三年のときですか。そして予科の三年のときに、支那研究会を立ち上げた。

上住氏 そうです、そうです。支那研究会は、われわれ予科一年のときからね、一応そういうものをつくらうじゃないかというあれで、いろんな活動はしとつたんです。

聞き手 ということは、支那研究会というのは支那語の仲間たちで何かやるうかという。

上住氏 そうです。

聞き手 話は変わりますが、予科のときの軍事教練というのどのような雰囲気でしたか。

上住氏 当時ね、習志野とか富士の裾野へ演習に出ましたね。

聞き手 これはどの学校も。

上住氏 一緒でしょうね。みんな、いっぱい来てますからね。

聞き手 そうですか。予科時代は、配属将校がたぶんちやうど変わる前後だったと思うんですけれども、入学されたときには飯島大佐ではない方でしたよね、きつと。

上住氏 違います、ええ。

聞き手 どなたでしたか。

上住氏 河辺という人だったかな。大佐でね、ちよつと年を取ったような人で。

聞き手 当時はいわゆる日本と中国の間で、実質的な戦争状態だったんですけれども、そういう日中関係は、大学の生活に何か影響を与えましたか。

上住氏 影響なかったでしょうね、おそらく。

聞き手 まあ、支那語科というのができたということの意味は、たぶん将来を見据えてのことだったんだと思うんですけれども、支那語を実際に履修する学生というのは、わりと自由に入れたのか、それとも限られた人数枠で人気があったのかどうか。

上住氏 どうだったかですね。要するにね、大学側とすればね、支那語科は少数でいいこうというあれで、四〇人までのクラスをつくったんですから。あとはね、みんなほかのドイツ語にしても六〇人ぐらいおったんじゃないですか。ドイツ語がA、B。それからC、D、Eまでフランス語ですか。私はFなんですから。

聞き手 一週間のうちに、支那語の授業というのはどれぐらいの割合を占めていたんですか。

上住氏 そうですね。三日はあったと思いますよ。わりと詰めてね。

聞き手 四〇人ですから、結束も勢い固くなる。これは

三年間続けるわけですか。

上住氏 そうです、そうです。ところがねえ、あの当時、二年浪人まではできるんですけど、それ以上するとみんな兵隊に持っていかれるということだね、ほかのクラスはわりと若かったんですけど、私のFクラスに関しては浪人が多いんです、二年浪人が。だから年寄りと立教中学から四年でくると、こう、差があるわけですね。

聞き手 年齢に。

上住氏 ええ。そうするとね、立教中学から来るのがもう、年齢が若いからね、何やかんやときき使われて。子供扱いされちゃう。

聞き手 支那語の先生というのは、例えば中国の方が。

上住氏 ええ、中国人です。陳文彬^{ちんぶん}というんですね。

聞き手 陳先生ですね。ということは、中国大陸での戦争はキャンパスライフには、日米開戦以降のような影響もなく、一億火の玉とかそういう雰囲気もなかった。

上住氏 そういのはなかったですよ。

聞き手 やはり遠い場所での戦争という印象ですか。

上住氏 ええ、そうだと思いますよ。大連の家でも、満州事変のときは兵隊が来ると、十人やそこらは泊めてあげたりしました。それこそ、満州の奥地のほうに行かれる人をみんな。そうそう野宿できませんから。

聞き手 一日の流れとしては、午前中に講義に出席、そ

れが終って午後はクラブ活動を、ということですね。キリスト教の雰囲気というのはどういふときに感じましたか。

上住氏 そうですねえ。まあ、主として英語の先生は、アメリカへ留学して帰ってきている先生が多かったですからね。それから、高……、あれは。

聞き手 高松孝治チャブレン。

上住氏 チャブレンのね。あの人なんかは、しょっちゅう、やつぱり、一週間に何べんか講義がありましたからね。そういうあれで。

聞き手 それは聖書か何かの授業ですかね。

上住氏 聖書をあてがわれて聖書の講義を受ける、というのではないですね。ただ、私は自分なりに聖書は持っておりましたけどね。

聞き手 聖書は入学のときに配られるのですか。

上住氏 いや、そんなことないですね。チャペルへ行けば聖書があつて、何ページを開ける、と言つて。それはもう備え付けのやつですからね。

聞き手 チャペルには、どういふときに行かれるのでしょうか。

上住氏 そうですねえ。まあ、授業は関係がなかったと思いますねえ。

聞き手 それでは、行きたい人が、行きたい時間に行く

という。それを促すようなこともなかったですか。

上住氏 ありませんでしたねえ。

聞き手 次に、ちょうど上住さんが入学された頃に立教出身の方が中国大陸に行かれて、何人が既に戦争で亡くなられるということもあつたようですね。昭和十四年から、実はチャペルで戦没者の慰霊祭を大学が主導して、実際にライフスナイダー総長を含めて、追悼の会をやつていたようなんです。それについては何かご記憶はありますか。

上住氏 それは礼拝堂へ行きました、実際に。それは覚えています。

聞き手 そんなときには、ライフスナイダーさんもまだいらした、つまり日米開戦前の話ですね。

上住氏 いましましたですね。

聞き手 そのときの印象を。当時、だれがどうしゃべつたかというのは難しいと思うんですけども、どんな雰囲気の中で営まれたというふうにご記憶をしておられますか。

上住氏 まあねえ、要するに立教の先輩が亡くなられたということと、悲しいことだなあ、ぐらいのもんですね。普通のお葬式に参列するような気持ちでね。

聞き手 では、どうして追悼礼拝が開かれるのをお知りになったのでしょうか。例えば、教室でこの日、この時

間に、というようなアナウンスが。

上住氏 それは掲示板に出たと思います。掲示板は、要するに青いラシヤが貼ったあれですね、必ず教務室の前に行つて、そういうのを注意してましたから。

聞き手 教務室の場所は、当時は今の図書館の近くでしたね。

上住氏 いや、予科のほうはね、いま理学部（四号館）ですか。その黄色い建物が予科だったんです。私たちができて二年目ぐらいじゃないですか。私たちの一年上のときにできあがつたと思ひましたからね。

聞き手 予科校舎。としますと、その教務室の前に掲示板があつて、そこでだいたいどういう学内行事があるのかというのを知ることになるわけですね。

上住氏 そうです、そうです。たしかね、地下にみんなあつたんじゃないですか、教務室が。

聞き手 半地下みたいになつてゐる。

上住氏 ええ、あれはね、ロッカーが全部あるんですよ。学生のロッカーが一人一つずつあてがわれて、鉄のね、ロッカーがずっと。あの横の地下に寿司屋があつたの。
聞き手 何ですか。そこでは学生が食ふことができるのですか。

上住氏 寿司屋が。みんな記憶がないと言ふんです。ないというのはね、高いから食べられないし。私は大連か

ら金を送ってきますからね、アルバイトとかそんな必要ないし。だから、ぜいたくな。

聞き手 学校の中に寿司屋さんがあるというのは、珍しい例だったんでしょうね。

上住氏 珍しいと思ひますよ。そんなに間口は広くないんですよ。そうですね、五、六人は、立ち食いですけれど食べられる。

聞き手 予科の生徒用に。すごいですね。次に、予科三年生になると当然、進学の話になると思うのですが、立教に行く、そのほかの学校に行く、あるいは就職する。当時は割合としてはどのような感じでしたか。だいたいにいきますか。

上住氏 予科は、立教の学部に行くものと思つてましたね。よその大学へ行くとか、あるいはよそからわれわれと一緒に学部へ行くということは、まず考えられなかつたですね。予科を出れば、もう必ず学部へ行けるものと思つてました。

聞き手 実際に、よほど成績が悪くない限り上に行けるような……。行けない学生というのは。

上住氏 それはねえ、まずおらなかつたと思ひますねえ。少なくとも私のクラスではおりませんでしたけど、ほかのクラスにおつたかどうか、それはわからないんですけどね。

経済学部

聞き手 そうですか。では、いよいよ学部に進学されるということですね。昭和でいうと十六年。予科の商科にいらしたので、そのまま経済学部に入學ということですね。

上住氏 はい。あの頃はね、商学科と経済学科と二つ、経済学部の中にあつたですね。

聞き手 上住さんは商学科に入學されるということですね。

上住氏 はい。

聞き手 特に予科と学部との違いというのは何か、感じになりましたか。

上住氏 予科の場合は教授といつても、どつちかということやっぱり若い先生が多いですよ。親しみはあつたと思います、何かにつけて。それで、学部に行きましたからね、なぜ教授が大きく見えたかといいますと、当時東大から追われた教授が皆、立教に來たんですね。有名な教授が。例えば、田辺忠男とかね、河西太一郎、それから中西寅雄、大塚久雄ですかね。そういう大物の教授が來まして。それで直接学生と面と向かつていて、しかも授業に出る学生はそうたくさんおりませんから、もう講義というより師弟というか、ものすごく近かつたですね。

そういう大物の教授が、社会に出てからどういふふうにしたらいいかと、そういうことまでも教えてくれますからね。だから、これは大したものだなと思ひましたね。今までの四〇分じゃなくて、二時間ぐらい講義を延々と続けますでしょう。

聞き手 なるほど。

上住氏 私は一番すごいと思つたのは、田辺忠男の経済原論、その講義がすごいと思つたですね。

聞き手 よく、そのようなお話を耳にします。

上住氏 ただ原論をひもどくというのじゃなくてね、要するに現在の社会が移りつつあるのと同時進行みたいな講義をやるわけですよ。例えば、企画院がどういふふうな意図で日本の戦力を持つていつてるかというのをしゃべるんですから、すごいですよ。

聞き手 なるほど。田辺先生の経済原論というのは、教科書はないわけですね。

上住氏 ありますよ、『経済原論』。

聞き手 そうでしたか。田辺教授は後に企画院の役員になりますね。

上住氏 ええ、偉い人だなと思つたですね。だからね、立教がうらやましいということを書きましたよ、慶応とか早稲田の連中にねえ。後に慶応から、三辺金蔵先生が学長で來られたですけどね。やっぱり三辺金蔵だつて、

立教へ来たらずう大したことないと思ひましたからね、その当時。立教の教授が数段上だと思つたですよ。

聞き手 三辺さんも、それなりのステータスがあられたわけでしょう。

上住氏 それはもう会計学の權威ですからね。これは大した人だと思ひますよ。思ひますけどね、まあ、大学を運営する上において、やつぱりある程度政治性がないといかんですよ。三辺さんじゃ、政治性というのがないでしょうからねえ。

聞き手 なるほど。印象に残つた先生のお一人に田辺先生とおっしゃられました、大学時代にクラブ活動、課外活動というのはどのような形で行われましたか。

上住氏 大学時代は海外事情研究会の幹事をやつてました。松下正壽先生ね、あれは私の部長です。あの先生は、立教出でもあるし、なかなか学生を大事にしましたね。しよっちゅう家まで呼んでくれてね。あの頃はまだ信濃町に家があつたですよ。

聞き手 なるほどねえ。松下先生は日米関係、フィリピンの関係についても研究されて本も出された、国際法学者。そういう方が海外事情研究会の部長に。それは大学に進学されてからのこと。

上住氏 もうその前、予科の時代からわれわれのクラスの連中はしよっちゅう出入りを。

聞き手 そうですか。

上住氏 教授室がありましたですね。食堂の前に二つありまして、あれは自由に出入りできて。

聞き手 なるほど。授業はもつぱら本館、時計台のあるあそこでやられてきたということですね。

上住氏 そうです。

聞き手 海外事情研究会で特に印象に残つたお仕事というか、活動は。

上住氏 そうですねえ。まあ、対外的にはね、今の例えは日大とか、明治あたりに中国の留学生が来てましたから、それとの交流ですね。それから、渉外的にはね、周作人（魯迅の弟）を呼んできたんですよ。

聞き手 周作人氏は海外事情研究会が呼んできたのですか。

上住氏 呼んできたんですよ。それで、立教で講演をしたんですよ。

聞き手 大変なお仕事を……。そうですね。

上住氏 七理重恵という人が、これは支那浪人みたいなタイプの人なんです。この人がそういう中国関係のルートを持っていたんですよ。

聞き手 七理重恵という方は支那語の先生ですか。

上住氏 支那語の時文といひましてね。要するに普通の口語体ではなくて、文語体の中国語なんです、それを

講義したんです。海外事情研究会の顧問の先生ですな。

それから中国の陳文彬という先生も顧問で。それに周作人は立教を出ているんですよね。

聞き手 そうですね。

上住氏 そういう関係で、学校側からも働きかけてね。

それからもう一つはね、当時シンガポールの市政長官が砂田重政（衆議院議員、立憲政友会幹事長をつとめ、四二「昭和十七」年からは南方総軍軍政顧問としてシンガポールに従軍）といって、その力もあった。

聞き手 立教のOBで、文部大臣などをやった衆議院議員・砂田重民氏（昭和十五年経済学部卒）の確か父君ですよ。周作人さんの来校というのは、学内の行事としても、大きかったようですね。

上住氏 そうですね。そう思いますよ。

聞き手 根岸由太郎先生や遠山郁三学長を招いて、講演もされましたね。そのアレンジメントも、海外事情研究会がしたという形に。

上住氏 そうです、はい。

聞き手 それで、そろそろ日米の関係がだんだん悪くなり、校宅にお住まいだったアメリカ人宣教師とか教授がポール・ラッシュさんを残して帰っていくというような雰囲気、日米関係の悪化の過程は、大学にはどのような形で影響を与えたように思われましたか。何か、具合が悪

くなってきたなというような雰囲気は。

上住氏 アメリカの教授が、われわれのときには六人ぐらいおったと思いますがね。一人減り二人減りというふうになって、だんだん学校を去っていきますけどね。まあ、英語にしても何にしても代理の、日本の先生がおりましたからね。しかも立教卒業の先生がおりましたから、さほどね……。英語をばかにしてもいいないで、勉強してましたからね。チャペルだって開いてましたから。われわれが出てから、あれが兵器庫になったとか何とか、大いに憤慨したんですけどね。まあ、われわれの時代は、それほど学校が、がらつと変わったということとはなかったと思いますよ。

聞き手 次に軍事教練について伺います。実際に予科の時代の教官と、大学に入ってから、ちょうど飯島大佐が着任される時期と重なるんだと思うんですけど、最初から飯島大佐は最悪というようなイメージであったのか、それとも戦況の展開とともに変わっていったのか。上住氏 これはねえ、飯島大佐だって、やっぱり気負って立教に來ただろうと思うんですよね。ということは、自分が明治大学を鍛えて、今度は、立教は軟弱だから、ひとつ変えてやりましようと思ひ込んできたわけですからね。とにかく、竹のむちを持って叩いてましたからね。いつでも持っていました。

聞き手 本場に叩いたんですか。

上住氏 奴隷と一緒にですわ。しかしね、飯島大佐が思うほど立教の学生は軟弱じゃなかったと思いますよ。われわれが予科三年ぐらいに飯島氏が来たんですかなあ。一緒に習志野に行ったときでもね、一緒に演習をして一緒に写真を撮っていますからね。急激に変わったんじゃないですかね。私が出て、すぐ変わったような気がするんですよ。それがひどかったと言うんですよ。私が出てね、一カ月、二カ月、三カ月ぐらいの間にね、変わったというんですね。

聞き手 着任されて終戦まで五年ぐらいあるわけですが、最初の三年間と残りの二年間というのが大きく違う、そういう傾向はあるんじゃないかと。

上住氏 そうでしょう。いつチャペルが武器庫になったか、私、知らないんですけど、そういうふうになるというのはもう激変ですよ、立教にしてみれば。しかもそれに同調した何人かの学長や教授が、みんな戦後追放されているわけですから。だから、やっぱり飯島大佐というよりも日本陸軍には抵抗できないですからね、教授だって学長だって。丸めこまれちゃったんじゃないですか。飯島の後ろに陸軍というものを背負ってきたわけですから、陸軍省を。

聞き手 少なくとも上住さんが在籍された頃の飯島大佐

のイメージと、卒業されてから伝えられる飯島大佐のイメージというのは、少しギャップがあると。

上住氏 ちょっと違う感じがするんですけどね。

聞き手 そこは大事ですね。最初から、いわゆる狂信的な雰囲気で乗り込んだというのでは、必ずしもなさそうだという。

上住氏 そうですねえ。まあ、本人はね、どういうつもりであつたか知りませんが、おそらく気負つて来たでしようねえ。明治はバンカラで、要するに駿河台だの、神田あたりで暴れ回っていたのを一応、こう手なずけてきて。それで結局、「軟弱な」キリスト教の大学、立教へ乗り込んで来たわけですから、気負つては来たでしょうけど。そうそう立教の学生も軟弱じゃなかったと思いますね、彼が来たときは。

要するに「学生は」というよりも、チャペルがあるとか、あるいは外人の教師がおつたとか、何やかんやの雰囲気自分と合わなかったのか、それはわからないですよ。あるいは、もう陸軍のお墨付きで乗り込んで来たから、何か、自分としてはやらんといかんかったような使命感にかられたんじゃないかと思うんですけどねえ。

聞き手 そうですね。飯島さんが着任されたのが昭和十六年の秋以降で、それまで明治の予科にいらしたようですが、彼が着任してからも、チャペルはそのまま開いて

いたわけですし。

上住氏 そうですね。

聞き手 礼拝も禁止というような雰囲気ではなかったよう
うで、事実、慰霊祭も日米開戦以後もチャペルで一回で
すけれども、行われているということですから。最初か
らキリスト教をすべて消し去るということを図して動
いていたという感じではないですね。

上住氏 私らがそのとき感じたのはね、まあ、フランス
の駐在武官までやったならばね、相当あか抜けた考えを
持っているんじゃないかと、逆にそう思ったぐらいです
よね。

聞き手 このフランス駐在武官の経歴というのは、当時
から皆さん知っていたわけですか。

上住氏 知っていたと思いますよ、ええ。

聞き手 なるほど。日本とアメリカが戦争をして、すぐ
遠山総長が天皇の開戦の詔書を予科校庭で読まれたので
すが、そのときには当然行かれていたわけですね。

上住氏 どうだったかね。

聞き手 いわゆる捧読式というんですかね。宣戦の詔書
を予科校舎南側の校庭で読み上げたということが、立教
大学新聞に大きく出ているんですが。真珠湾攻撃の翌日
ですね。まあ、少なくともそれからチャペルは開いて
いて。日米戦争以後、チャペルに行かれたというご記憶

はありますか。

上住氏 ないでしょうねえ。

聞き手 それと、ひとつわからないのですが、報国団と
いうのがありましたよね。

上住氏 ええ、あれはね、われわれのときにもありまし
たけどね。われわれの一年上の連中が満州へ来たことが
ありますよ。報国団が。五人か六人ね。あのときは小川
徳治教授が、たしか引率してきたと思いますけれど。

聞き手 立教大学新聞だけで見ていくと、報国団という
のが立教大学に作られ、海外事情研究会も含む各クラブ
が全部その下に置かれていて、当時の新聞とかを見る
限りではだれでも知っている大きな組織という印象があ
るんですけども、実際に当時いらした方にお話を伺っ
ても、「何だ、それは」というような。

上住氏 いやたしかにね、それは新聞報道をしたほどね、
なかなか。

聞き手 なじんでいたわけではないということでしょう
か。としますと、当事者としては報国団の一員だとい
う意識はほぼない。

上住氏 ないですねえ。

聞き手 あとは、尽忠隊というのはご存じですか。

上住氏 いや、知らないですね。それは何年頃ですか。

聞き手 昭和十六年十月なんですけれども、これは文部

省の勧めで各大学にできたようです。学長が隊長になって、河西経済学部長が第一大隊の大隊長、これは学部です。第二大隊が予科、隊長が曾禰予科長。第二大隊の第一中隊に予科三年生がなるとか、何か学校が軍隊の組織に擬せられて。

上住氏 それは大学が対外的に、例えば文部省とか陸軍省に対するジェスチャーじゃないですか。

聞き手 なるほど。

上住氏 そんなのね、聞いたこともないしね。

聞き手 対外的なアピールの面が、やっぱり強いということなのですかね。

上住氏 と思いますね。

聞き手 あとは、巷では英米色をつぶしてしまえというような雰囲気があったようですが、英米色が立教でどのように取り扱われたか、何か印象的なことはありますか。英語の授業は戦争中もあったのでしょうか。

上住氏 ずっとありましたね。まあ、学部に行くと英語の授業というのは選択ですからね。

聞き手 語学で必須のものは。

上住氏 学部では、ないです。

聞き手 それでは、アメリカと戦争をしたから、立教が特に何か影響を受けた、立教ゆえの影響というのは。

上住氏 それはないと思いますね。

聞き手 社会的な目というのは、どのようでしたか。先ほどのお話では、飯島大佐が、校旗の十字が気に入らなくて降ろさせたというエピソードに触れられていたが……、社会的に白眼視されるというような雰囲気でも

上住氏 それはやっぱり、学徒出陣の、しかも東条英機の前で行進をやるわけだから。

聞き手 例の「自由の学府」の校歌も歌えなくなるような、表向きには。

上住氏 そうですね。

聞き手 あとはよく一部で言われているんですけども、「立教はミッシン・スクールだから、朝鮮人の学生をわりと積極的に受け入れた」という話があるんですが、実際にそういう雰囲気はありましたか。

上住氏 ええ、予科のときに私のクラスでも三人おったですから。でも全然分け隔てもなく。その当時、朝鮮の学生は一人で旅行できないとかいうこともありましたが、私たちはもう平気で連れて、軽井沢のほうに行ったり、伊豆半島のほうに行ったり、箱根に行ったり、連れて行ったのがおりますよ。出世頭もおりますからね。韓国銀行の副頭取にまでなったんですか。それから、長期信用銀行の頭取をやったのがおりますから。

聞き手 そういう人たちが立教を選ぶというのは、韓国、朝鮮に比較的クリスチャンが多いので、そういう宗教的

な理由で。

上住氏 別に彼もクリスチャンじゃなかったと思いますけどね。それこそわれわれは平等に付き合っていました。

聞き手 とりわけ立教に朝鮮半島の人が多いというのが、学内に雰囲気としてあったというわけではないわけですね。話は変わりますが、勤労奉仕というところでいろんな場所に行かれて、だんだん授業の割合が減っていったというのは聞きますけれども。

上住氏 私はそういう目にあってないんです。勤労奉仕は一日だけ行っただけです。

聞き手 としますと、授業は少なくとも昭和十八年の半ばぐらいまでは受けられていたわけですか。

上住氏 そうです、はい。

聞き手 あと、戦争中に文学部がなくなったという話がありますか。

上住氏 全然、それは知らないです。

聞き手 戦争中の大学新聞を見ると、とにかく学校のトップの人が、「お国のために軍隊に入って神になれ、進んで国に奉公をしろ」というような趣旨で訓辞を述べている。つまり大学が戦時動員、軍隊への入営・入団を促したという側面が、新聞記事からうかがえるのですが、実際に学生の立場として、当時の大学当局の戦争に対する、あるいは国家と学生とのかわりに対する考えというの

は、どのように受け取られましたか。

上住氏 それはね、大学としてはあくまでも要するに学問の府を貫きたいわけでしょうね。ところが、そのときの国家というものから考えれば、要するに学問どころじゃない、銃を取れというような意識で、大学に迫いかぶせているんじゃないですか。学校としてはあくまでも学問というものを学生に、という考えだったと思いますよ。

聞き手 それでは、学生を前にしたときの訓辞とか教室での授業の中で、教授が時局をどのように認識し、学生としてどうあるべきかというお話は出ましたでしょうか。入隊をおおるような話などは……。

上住氏 それは出ませんね。いくら飯島大佐がむちを振ってみたところでね、踊らんとしますよ。踊ったのは、それは何人かの先生でしょう。それは迎合したんでしょうけど。われわれは、そんな感じを一つも受けなかったですね。授業中にそんなことを言おうものなら、「おまえ、行け」という声が出てくるんじゃないですか、むしろ。

聞き手 なるほど。

上住氏 私なんか、海軍に入ってから言われたですよ、「ペン」を捨てて銃を取ってきた君たちに大いに期待する」ということをね。海軍の偉い人はそう言っていましたよ、訓辞のときは。もう、えらい遠慮してね、よう来てくれ

たというような意識でね。だからね、学内で、そういう、あおるようなことを授業のときに言うというのは、皆無だったですね。

聞き手 それは大事な証言ですね。

上住氏 だから、飯島大佐でも、むち振って「おまえら、遊んでおるんだったら戦争へ行け」と、そんなことも言わなかったと思いますよ。教練だって、課程がありますよね。基本動作、応用動作から、どういうふうに進歩に立つとか、攻めていくときはどうするかというのを。それは要するに軍事教練であつてね。軍事教練を離れて、ゲートル巻いて授業を受けたかと言ったら、そんなことはありませんね。

聞き手 教練の授業のときには、常に飯島大佐が教授するわけですね。

上住氏 そうですね。

聞き手 その中にあつても……。

上住氏 まあ、その下に何人かおりますよ、教官がね。

中尉、少尉とか、あれは准尉というんですか。そういう人が五、六人おりましたけど、別にそれがハツパをかけてわれわれをしいたという思いもありませんしね。だから演習に行つとつても、演習が終わるともう教官を囲んで雑談してみたり。

聞き手 それは飯島さんをですか。

上住氏 そうですね。その写真がありますから。

聞き手 とすれば、上住さんの後輩の方々の証言を交えてみると、飯島大佐に対するイメージはまた別の側面も浮き彫りになるのでしょうかね。

上住氏 だからね、それは、「飯島大佐が明治大学でこういうことをした」という話、それから来た当初から竹のむちを持つて回つて、現にムチで強制して叩いたことわたしもそれを見てますけどね。じゃあ、それはみんながみんなそれで叩かれたかという、それは叩かれるべくして叩かれたのがおりますよね。

聞き手 なるほど。飯島さんが着任された当時から、「今回の教官は明治で肅清をやつてきたんだ」という話は、当時から語られていたのですか。

上住氏 それはもう、すぐ流れたですね。

聞き手 つまり厳しいという。

上住氏 そうですね。

聞き手 ところで、クラブ活動はいつまでされていたか。海外事情研究会は。

上住氏 最後までやりました。

聞き手 そのときに学校側から何か強制されるとか、誘導されるとか、活動内容について微妙なことを指示されるとか、そういったことはありましたか。

上住氏 いや、全然そんな指示は受けませんでしたね。

聞き手 なるほど。戦時下の立教といっても、いろいろな面がありそうですね。

上住氏 もう全部自由にこっちがやって、別に報告もしなかったと思いますよ。雑談的に、「こういうこと、こういうこと」と。「あつ、そうか」ということで。

聞き手 海外事情研究会で、先輩もいるわけですよ。

上住氏 おりました。おつてもね、こう言ったらあれですけど、先輩が生ぬるいからね、全部こっちが主導でしたから、先輩も任せたのじゃないかね。うるさいやつだと思っただしようね、われわれの学年を。ということは、年齢差はそうないんですよ。皆、われわれ浪人組が幹事をやるしね。相当みんな苦労してきたやつがおるわけですから。

聞き手 あとは、学校の行事でキリスト教的なものもあると思うんですね。例えば、当時卒業生の礼拝というのはありましたか。

上住氏 卒業礼拝にわれわれが参加したということは、ないですね。当事者が、例えばチャペルに行つて、卒業証書をもらったのを見せてもらつた程度ですね。卒業生から角帽をもらうとかね。そんな程度ですね。

聞き手 左翼の運動を弾圧するとか、学内でそういった出来事がありましたか。

上住氏 それもねえ……。いや、そのね、特高のやつが

紛れ込んでいるということは聞いたですけれどね。そんなもん、噂だけでね。だれがどれつて。そんな左翼的な講義をしているわけじゃないね。それで終わつてますね。早稲田とかの連中の話を聞くと、やつぱり特高にやられたとかいふのを聞きましたけど。そういう経験は、少なくとも立教では、ありませんでした。

聞き手 なるほど。教練に反対するというような発想や動きも当時はなかった……。

上住氏 ないですよ。何といつても、少ないんですから。数で……。

聞き手 圧倒するということのも難しいですね。

上住氏 考えてみたらねえ、率からいっても教授のほうが多いような気がしたですよ。講義に出てこないですよ、みんな。せつかく教授が一生懸命勉強してきているんだろうからねえ。

聞き手 われわれが戦時下の立教について判断するときの材料の一つに、先ほども触れましたが、立教大学新聞という大学新聞があるのですが、学生が目にする機会というのは実際にあつたのですか。それとも例えば壁新聞のように掲示板に貼られるのか、あるいは各学生に配られるのか、それとも必要な者が人づてでもらうのか、そこら辺のことを……。

上住氏 あの新聞もね、発行のたびに配られるというの

は、あまり記憶にないですね。

聞き手 在学中に読まれたというご記憶は。

上住氏 それはねえ、今おっしゃったように、掲示板みたいなところに貼っているやつを拾い読みして、ああ、この程度かというもんでねえ。

聞き手 としますと、掲示板には貼っていたのですかね。

上住氏 と思いますよ。それでなかったら立教のことは、そうですねえ、教授の論文とかそういうのは小冊子でその都度出ているから、それをもらったり何かして勉強してました。みんなに行き渡るほど新聞が出とったんか……。新聞部というのは、確かにあることはありましたよ、それはね。

聞き手 学内の動きについては、ご自身の経験と、あるいは掲示板に出ている学校側が出すインフォメーションを見て、ある程度判断をする。あとは教室で先生との雑談を通して知る。なるほどね。残されている史料だけで判断すると、非常にゆがめられた歴史像ができてしまうのかなという感じがしますね。

最後に、例の黒板の書き置きを残されたときの情景といえますか、どういう事情でという、その辺のお話を伺えますか。あれは海外事情研究会の後輩に向けて書いたのですか。

上住氏 はい。

聞き手 海外事情研究会の部室があったわけ。

上住氏 そうです、そうです。

聞き手 それは教室のような形をしてたんですか。

上住氏 いやあ、そうですね。このぐらい（約十六平米の事務所）の部屋ですよ。

聞き手 ああ、そうですね。学内のどの辺にあったのですか。

上住氏 ええとね、バラックの大きな教室が。

聞き手 あの予科の。

上住氏 予科の庭の、弓道場がありました。その、ちょうど前の辺ですよ。はす向かいの。

聞き手 それはほかの例えば部室なんかいろいろ入って。

上住氏 隣にほかの部室があったですね。それから、向かい側に英語会の部室があったですね。

聞き手 ああ、そうですね。

上住氏 だから、池部良なんか、あそこを出入りしているあれですね。

聞き手 池部さんは十六年卒ですね。では、その部室に、海軍に入られる直前に書いて……。

上住氏 あれは予備学生に受かってから、たしか書いたんですわ。もう何日間か、ということは、もう自然と学校へ来ないでいいようになりましたからね。それで最後

に。部員とも、お別れのあれがとうとうできなかったもんだから。

聞き手 黒板に書いて、それでご自分のカメラで撮っていらつしやうて。

上住氏 そうですね。

聞き手 その頃、カメラとかフィルムは、かなり高価なものだったと思いますが。

上住氏 そうですね。大連は、カメラが安いんです。だから、帰るたんびに、友だちにごつかつてね。まあ、一台は何とか持つてこれるんですけど、二台持つてきたこともありますけどね。ひどいときには持つてきて売って、学費や、遊ぶ資金に。もう、ライカとか、ああいうのは半値ですからね。

聞き手 ああ、そうですね。

上住氏 ドイツと満州の貿易協定がありましたから。大連は昔からフリーポートですからね。ただ、船の場合はうるさいですからね。だから、いつも安い三等の切符を買って、兄貴の友だちが税関かパーサーにおるので、その部屋に荷物を移しちやうてね。だから食事といったら一等食を運んでくれる。大連航路はよかったですよ。

聞き手 これは、こういう読み方でよろしいですか。
「部員諸君、長い間、お世話になりました。愈々海軍予備学生として征きます。学徒の進むべき路も遂に確定し

ました。共に頑張りませう。」ですかね。

上住氏 ええ。

聞き手 なるほど。予科校舎の近くにあった部室の黒板に、昭和十八年九月頃にお書きになった。

上住氏 そうですね。

聞き手 今日は、大変長い間ありがとうございました。

(二〇〇一年十二月十二日収録)

※ 文中に、現在では差別語とされる「支那」の表記が現れています。但し、歴史の証言という本稿の性質から、科目名「支那語」、クラブ名「支那研究会」など、当時の呼称をそのまま用いたことをお断り致します。



1940（昭和15）年4月28日・湯島聖堂にて。
前列左の人物が七里氏、その後が上住氏。